

Title	魏曹操の楽府：漢古楽府との関連性について
Sub Title	Le-fu (楽府) of Wei Cao-Cao (魏曹操) the relationship with Gu Le-fu (古楽府) of Han (漢) dynasty
Author	平井, 徹(Hirai, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.43- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 魏曹操の樂府

——漢古樂府との関連性について——

平井 徹

中国史上初の、全国的な本格政權となつた漢王朝の後、魏晉南北朝の分裂時代が四百年続いた。この時代は戦亂の世である一方、詩文・訓詁学・芸術の分野で大きな変革を見せている。興味つきないテーマは散見するが、その出発点として、後漢末・建安年間（一九六―二二〇）の文学（實際は三國魏の文学）、就中曹操の樂府について管見してみたい。曹操は歴史上の卓越した政治家・武人であるのみならず、雄大な感情とあふれる才能を持った学者・詩人でもあった。かれは文才を愛し、文人学士を集め、文学史上建安文学の代表者として出現した。建安文学は曹操・曹丕・曹植父子（三曹と称する）を中心に花開くが、曹操の強固な政治勢力を根本に醸成されたものである。

曹操が作った詩文は、以下の如くであつたとされている。

魏武帝集二十六卷。梁三十卷、録一卷、梁又有武皇帝逸集十卷、亡。

魏武帝集新撰十卷。

〔隋書〕志第三十・經籍四〕

しかし、その後この書は絶え、作品の多くは散佚し、今日では三十余篇の詩と、断片的なものを含めて百数十篇の文

章が伝えられているに過ぎない。しかし幸いにも、『宋書』樂志と北宋・神宗期（十一世紀）の郭茂倩の『樂府詩集』によって、我々は曹操の樂府を読むことができる。両書が収録する作品は殆ど同じであるが、そのなかには「却東西門行」のように『樂府詩集』（卷二十七）のみ見えるものもある。曹操の作品は全て器樂の伴奏により節をつけ歌う樂府の形式で、民間歌謡を出自とする相和歌辭に属する。

さて、曹操がなみなみならぬ好學の持ち主であつたことは、様々な資料によって窺い知ることができる。ここにその一端を挙げよう。

每與人談論、戲弄言誦、盡無所隱。

〔三國志・魏書・武帝紀・註引郭頒「曹瞞伝」〕

是以創造大業、文武並施、御軍三十餘年、手不捨書、晝則講武策、夜則思經傳、登高必賦、及造新詩、

被之管弦、皆成樂章。

〔三國志・魏書・武帝紀・註引王沈「魏書」〕

魏武以相王之尊、雅愛詩章。

〔文心雕龍「時序篇第四十五」〕

孔子云、五十以學易、可以無大過矣。魏武袁遺老而弥篤。此皆少學而老不倦也。

〔顏之推「顏氏家訓」〕

これまでの傾向では、曹操の政治家としての面に関心を寄せるものが多く、彼の好學、文學作品についてはまだまだ検討すべき課題があると思われる。時に文學史的な意義を論ずる人はいるにしても、私が管見した限り、日本で刊行された中国文學史の教科書で曹操の樂府を取り上げて説明している書は一種のみであった。具体的な作品について言及した論文も、僅かな数にかぎられている。しかも、一方的な考察が多く、彼の文學の問題について首肯できる叙述は少ない。「短歌行」は人材登用のための作品であり、「苦寒行」は兵士掌握の作品であるとか、政治的意図のみで解釈されているし、曹操が宦官の孫であるという出自のみで、曹操の文學的個性など全てに説明をつけてしまっている。曹操の樂

府に全く功利的な面がなかったとは言えないが、詩精神に触れられないのは残念なことでもあるし、問題も解決しないであろう。詩は虚構の世界の産物である。

又、魏晉南北朝期の思想は、道教によって代表されると把握することが多い。そこで、文学にも儒教の拘束から離れて独立の気運があらわれた、としばし説明される。在来の君臣の間の習慣を捨て、多くの俊才を集め、サロンを形成したことと関連づけられたりもする。しかし、「典論論文」に見える「經国大業、不朽盛事」を文学を儒教から脱して独立させた存在たらしめんとした、という解釈には疑問が残る。やはり依然として「詩言志」の儒教的文学観によって、建安文学は覆われていたと思われる。

曹操の樂府には、儒教思想の発露があちこちに見受けられる。だが、それまでの古樂府とは、詩作の精神も目的も異なると考えられる。周辺の部分的問題に偏ることなく、表現の中に内在された感性・文学性を中心に、検討を加えた。い。

梁の時代に著された二大文学評論書、『詩品』『文心雕龍』には、

曹公古直、甚有悲涼之句。叙不如丕、亦稱三祖。〔鐘嶸『詩品』卷下（下品）〕

至于魏之三祖、気爽才麗、宰割辭調、音靡節平。〔『文心雕龍』樂府篇第七〕

とあるように、曹操の評価はあまり高くない。「古直」は、古代風の質朴さといった意味で、曹操の樂府の特質を言い得て妙ではあるが、あまり高い評価の言葉ではあるまい。それは、曹操が孫の明帝曹叡と同様に「下品」にランクされていることから明らかである。『詩品』『文心雕龍』（「序」と「明詩篇」においても）ともに、曹操・曹丕・曹叡を「三祖」と称しているが、ひとからげに言うのは無理がある。そこで、清の王士禛は、「下品の魏武は宜しく上品に在る

べし」(『漁洋詩話』)と評するのである。王士禛は、『詩品』の評価を妥当とせず、彼の主観でランクがえをしているが、下品を上品にと述べているのは、実に曹操一人である。六朝期の流麗な文体が好まれた『詩品』の時代には、「古直悲涼」は時代の好尚にそぐわなかったであろうが、最終的には読者の主観に属するものであろう。

魏武・魏文父子、橫槊賦詩、雖迺壯抑揚、而乏帝王之度。

〔清 陳巖肖『庚溪詩話』卷上〕

というマイナス評価を与える人もいるのだから。

しかし、建安文学は、後世、文学のいきづまりが感じられた際、常に回顧される時代となり、「建安体」「建安風骨」と呼ばれるに至った。

文章未墮、必有英絶、領袖之者、非弟而誰。每欲論之、無可與語、思吾子建(曹植)、一共商榷。

〔蕭綱「與湘東王書」〕『梁書』卷四十九・文学上・庾肩吾伝〕

蓬萊文章建安骨。

〔李白「宣州謝朓樓餞別校書叔雲」〕

魏晉南北朝時詩にかねてから関心を持っていた私は、後世の文学を考へるにしても、その視点を学ぶためにも、まず「建安文学」の研究を企図した。その指導者として先頭に立った、曹操の楽府を検討することは、意味あることと考える。

本稿では、曹操の楽府のテーマの一つである、乱世に生きる人間としての苦しみ、悲しみを歌った「薤露」「蒿里行」の二作品を取り上げ、漢古楽府との関連性を中心に、以下述べていくこととする。

創作者及び保護者、演出者でもあった曹操が用いたのは、それまでの文人たちが好んで制作した、韻文的散文、修辭

的技巧を重視する「賦」ではなく、彼の作品とされている詩の全ては、漢代の民間歌謡である「樂府」（がふ）の形式に則<sup>(1)</sup>っている。

樂府はもと漢の武帝が、紀元前一二〇年に宮中に設けた音楽を司る役所である樂府（がくふ）に採用された、ほとんど全てが作者不明の民間の歌謡の意である。おかかえの樂人たちは、そこで盛んに典札用の詩作に励み、また、治世に資するため、『詩經』国風に倣って、多くの民間の歌謡が採集された。樂府は、樂器の伴奏によって歌われるもので、（今となつては知るよしもないが）曲が先にあり、それに合わせて歌詞を作った。曲の種類は決まっておらず、その各々に名がついていて、これらに合せて作った歌詞は、その曲名を題とする。これが樂府題である。「短歌行」のように、曹操の作品にも、樂府題である「歌・行」などの語がついているものが多い。<sup>(2)</sup>

曹操は、この民間歌謡に取り上げられた題を使い、「憐時悼乱」（時代を嘆き、動乱の世を悼む）を歌っている。彼の樂府の一つの大きなテーマと言えよう。

### 薤露

惟漢廿二世

惟れ漢の廿二世

所任誠不良

任ずる所は誠に良からず

沐猴而冠帯

沐猴にして冠帯し

知小而謀彊

知は小さくして謀は彊し

猶豫不敢斷

猶豫して敢て断ぜず

因狩執君王

狩に因りて君王を執る

白虹爲貫日

白虹は爲めに日を貫き

己亦先受殃

己亦た先ず殃を受く

賊臣持國柄

賊臣国柄を持し

殺主滅宇京

主を殺して宇京を滅ぼす

蕩覆帝基業

帝の基業を蕩覆し

宗廟以燔喪

宗廟は以て燔喪す

播越西遷移

播越して西に遷移し

號泣而且行

号泣して且ゆき行く

瞻彼洛城郭

彼の洛城の郭を瞻みれば

微子爲哀傷

微子爲に哀傷す

○宋書樂志。樂府詩集二十七。

後世、

漢末實錄、眞詩史也。

〔明 鐘惺「古詩歸」卷七〕

と呼ばれるようになった作品の一つである。

曹操が「薤はらの上の露」と世のはかなさを歌ったように、打ち続く争乱のため、後漢王朝は崩壊、終末期を迎えていた。詩の中には人名が一つも現れないが、それをもたらしたのは「沐猴にして冠帯(3)」と評されている、何進という小人物に国を委ねたためであり、そして「猶予して敢て断」じなかったがために「己亦た先ず殃を受く」の語の如く、クーデターにより何進が殺された中平六年（一八九）、その混乱につけ入って台頭した、詩中で「賊臣」と酷される軍閥の董卓の狼藉にある、と曹操は断じている。「主を殺して宇京を滅ぼす」とは、董卓が何進によってその年擁立された少帝（劉辯、詩中の「君王」）を廃し、母の何太后（何進の妹）とともに弑し、帝の異母弟、献帝（劉協）を即位させたことを指し、「播越して西に遷移し」とは、翌初平元年（一九〇）、関東の州郡が袁紹を盟主に反董卓の兵を挙げたため、董卓が長安遷都を強行、専横を極めたことを言っている。この時、曹操も董卓討伐のため諸將と挙兵しているが、董卓によって焼き払われた「洛城の郭を瞻」て「為に哀傷す」と、最後の二句でのみ曹操の心情の吐露があつて、この詩は結ばれている。「微子」は、殷の紂王の庶兄で紂王を諫めて聞かれず、殷の滅亡後、周公の命により殷の先祀を奉じたという有徳の人物で、『論語』の篇名によって名高い。代表的な作品である「短歌行」「苦寒行」などでも顯著であるが、曹操はしばしば自己を古の聖人（特に周の文王と周公旦）に比して歌っており、為政者として儒教思想に傾倒しているさまが見受けられる。

元来、漢代から伝えられる古楽府である「薤露」の本歌は、柩を挽いていく時に歌う悲しみの歌、つまり挽歌であつた。人の命のはかなさを露に比喻する内容となっている。簡潔であるからこそ、リズムに載せて繰り返し歌われ、その余韻は人々の悲しみを誘ったことであらう。

薙露 相和歌辞

薙上露 何易晞

露晞明朝更復落 人死一去何時歸

(薙上の露 何ぞ晞かほき易かき 露は晞くも明朝には更に復た落つるも 人は死して一たび去らば何れの時にか  
帰らん)

三・三・七・七の四句構成は、古樂府に多く見られる形式である。上二句と下二句で歌い方が異なつたのであろう。

「これ必ずしも樂府解題に拘わらず、曹氏父子みな樂府の題目を用いて自ら詩を作れるのみ。」〔曹植「箜篌引」引黄節注〕と清の方東樹が評するように、曹操が、古樂府のモチーフを用いて、後漢王朝葬送の歌として定着し、夏目漱石の「薙露行」にも受け継がれている。<sup>(4)</sup> ちなみに「薙露」の語は、後世挽歌の代名詞として定着し、夏目漱石の「薙露行」にも受け継がれている。

ここでもう一首、同じ時期をテーマとした佳作である「蒿里行」を挙げてみよう。やはりもとは民間の挽歌の題である。

蒿里行

關東有義士

關東に義士有り

興兵討羣凶

兵を興して群凶を討つ

初期會盟津

初め盟津に會するを期し

乃心在咸陽

乃の心は咸陽に在り

軍合力不齊

軍合うも力は齊はず

躊躇而雁行

躊躇して雁行す

勢利使人争

勢利人をして争はしめ

嗣還自相戕

嗣いで還た自ら相戕せこなう

淮南弟稱號

淮南に弟は号を稱し

刻璽於北方

璽を北方に刻む

鎧甲生蟣虱

鎧甲には蟣虱きしつ生じ

萬姓以死亡

万姓は以て死亡す

白骨露於野

白骨は野に露され

千里無鷄鳴

千里鷄鳴無し

生民百遺一

生民は百に一を遺すのみ

念之斷人腸

これを念へば人の腸を断たしむ

○宋書樂志。樂府詩集二十七。

「盟津（孟津）に会す」とは、嘗て周の武王が殷の紂王を討つた時に諸侯と同盟を結んだとされる地であり、「乃の心は咸陽に在り」とは、『尚書』・康王之誥に見える「爾の身は外に在りと雖も、乃の心は王室に在らざること罔かれ」の語に基づいて、諸侯が咸陽（實際は長安）の後漢王室に忠心を抱いていることを表す。

しかし、反董卓諸侯の連合軍の内部では利害関係が生じ、「躊躇して雁行」（雁の列のように斜め）してまとまらない。袁紹の弟（従弟ともいう）袁術は、「淮南に（帝）号を（僭）称」し、北方では袁紹が天子の玉璽を捏造し、群雄割拠の様相を呈する。後半四句に庶民の塗炭の苦しみ、非人情の悲惨な光景が描かれ、最後の一句に「これを念えば人の腸を断たしむ」と、曹操の感情表現で最高潮を迎える。私はここに「猶予」（「薤露」）や「躊躇」（「蒿里行」）を憎み、それによって乱れた世をすくうのは己しかない、という当事者の自負心を保ちながら、武人としてではなく、距離を置いて客観的に現実を見る、詩人としての曹操の「眼」を感じる。「薤露」における「哀傷」、「蒿里行」における「断人腸」は、曹操の心からの感情として生み出された言葉である、と解釈して間違いはあるまいが、逆に第三者としての冷静な、感傷に浸ってなどいられない、という視点が垣間見られるのではなかろうか。「漢末実録」「詩史」と称されても、単なる事実の記録ではない。詩人の感性がそこに内在されていると見るべきであらう。

古楽府の「蒿里」の本歌は以下のとおりである。

蒿里 相和歌辞

蒿里誰家地 聚斂魂魄無賢愚

鬼伯一何相催促 人命不得少踟蹰

(蒿里は誰が家の地ぞ 魂魄を聚斂して賢愚無し)

鬼伯一えに何ぞ相催促するや 人命は少しも踟蹰するを得ず)

『樂府詩集』卷二十七所引の晉の崔豹の『古今注』は、詩題の「薤露」「蒿里」について、次のように伝える。——  
「薤露」はもと「蒿里」と一組になっていたのを、漢の武帝時代の音楽家李延年が二つに分け、「薤露」は王公貴人用に、「蒿里」は士大夫庶人用に作曲したという。<sup>(5)</sup>

蒿里は別名「泰山行吟」といわれるごとく、泰山の南の山名で、死者の靈魂が集められる冥土(冥府)を意味するといふ。これらを歌いながら、柩を載せた車を挽いて、葬列は墓場に向かったのであろう。古樂府中で、死は人を俟つてくれないという意で用いられた「踟蹰」という言葉を、曹操は、「躊躇」と置き換え、後漢王朝の衰退を早めた行いとして、マイナスイメージで捉えていることに注目しておきたい。<sup>(6)</sup>

此用樂府題、敍漢末時事。所以然者、以所詠喪亡之哀、足當挽歌也。而薤露哀君、蒿里哀臣、亦有次第。

(清 方東樹『昭昧詹言』卷二)

の評も、『古今注』を踏まえていることに疑いのないところである。

『鐘記室詩品箋』の著者である民国の古直氏は、前掲の鐘嶸『詩品』の

曹公古直、甚有悲涼之句。叡不如丕、亦稱三祖。

に関連して、曹操の詩の「尤も悲涼なる者」として、「蒿里行」の「白骨は野に露され、千里鶏鳴無し。生民は百に一を遺すのみ、これを念えば人の腸を断たしむ」を例として引いている。行軍中の苦しみをうたう「苦寒行」をそれに抵

たる作品とするむきもあるが、「蒿里行」に描かれたこの非人情の世界こそ、「悲涼」と呼ぶにふさわしい。

以上、「薤露」「蒿里行」の二首を見てきたが、曹操は、古楽府の主題やモチーフを継承しつつも、雑言ではなく五言のリズムに己を載せ、また、いずれも十六句の長さの後漢王朝の葬送という新世界を構築、表現技術の精度を高めることに成功している。しかし一方で、曹操の楽府は、既存の古楽府・古詩の物語的な枠組を踏襲した作品とも言うことができる。<sup>(1)</sup>建安文学の大きな特徴に、作者の置かれたプライベートな状況に即して作られた、所謂贈答詩・公讌詩の出現を挙げることができるが、曹操はそのような作品を一首も残していない。贈答のスタイルを取ることによって、従来、無名の且つ一般的な共通感情を盛り込む器に過ぎなかった五言詩は、個々の詩人の芸術、自己表現の場へと一步を踏み出していく。しかし（息子曹丕の作品を一見してもわかるが）、その場面設定、用いられた比喩の常套性、サロン化して視野が狭窄になったことなどの理由から、類型表現から脱しきれぬ、こじんまりとした作品が増えてきたのも事実である。

その意味で曹操の楽府は、漢の古楽府と魏晋南北朝詩を結ぶ過渡期に開いた花であったと言えまいか。されば、沈徳潜が、

孟徳（曹操）詩猶是漢音、子桓（曹丕）以下、純乎魏響、沈雄俊爽、時露霸氣。

〔清〕沈徳潜『古詩源』卷五

と評して、それ以降の作品には失われた「漢代の歌謡」の味わいを保つたものであるのも首肯できる。

最後に、同じ時期の戦乱を題材にした作品として私が想起した、建安七子の代表である王粲（一七七―二二七）の有名な「七哀詩」（『文選』卷二十三所收）を挙げて、比較対照しておきたい。「七哀」は後漢末にできた新しい楽府題で

あろうといわれ、「七」については説が分かれるが、要は「哀しみのうた」である。

七哀詩 三首 其一 王粲

西京亂無象

西京乱れて象なま無く

豺虎方遘患

豺虎方に患を遘なす

復棄中國去

復た中国を棄てて去り

遠身適荆蛮

身を遠ざけて荆蛮に適く

親戚對我悲

親戚我に對いて悲しみ

朋友相追攀

朋友相追すがいて攀る

出門無所見

門を出づれども見る所無く

白骨蔽平原

白骨平原を蔽うう

路有飢婦人

路に飢えたる婦人有り

抱子棄草間

子を抱いて草間に棄つ

顧聞號泣声

顧みて号泣の声を聞くも

揮涕独不還

涕を揮つて独り還らず

未知身死處

未だ身の死する處を知らず

何能兩相完

何ぞ能く両つながら相完からんと

驅馬棄之去

馬を驅つて之を棄てて去る

不忍聽此言

此の言を聴くに忍びざればなり

南登霸陵岸

南のかた霸陵の岸に登り

廻首望長安

首を迴らして長安を望む

悟彼下泉人

悟る彼の下泉の人

喟然傷心肝

喟然として心肝を傷ましむ

モチーフとして白骨が共に登場し、悲惨な状況を描いた結末に、一人称の情緒的表現（使役形）で締め括っている点、後年追懷して詠んでいるであろう点など、<sup>(8)</sup>「蒿里行」によく似ていると言えよう。

「豺虎」は、山犬と虎、転じて、董卓の死後、長安を壟断し、霸權を求めて争つた軍閥の李傕と郭汜を指している。時期的には「蒿里行」でうたわれた初平元年（一九〇）から三年後のことである。当時王粲は十七歳。争乱を逃れ、当時は比較的安定していた劉表治世下の荊州襄陽へ、<sup>(9)</sup>苦難の旅を続けていた。かかる時代に遭遇した彼もまた、被害者であったわけだが、この経験を通して、知識人として強い自覚を持ち、優れた描写力によって現実を直視した。

王粲は、董卓の長安遷都にも同行していたので、民衆の苦しみを、再びつぶさに目睹することとなった。その間、長安に留まっていた時期に大学者の蔡邕に見いだされ、「我も及ばぬ異才」と言わしめ、後継者として万巻の書全てを送られ学問を積み、それに、董卓が誅殺された直後、王允によって蔡邕が獄死するという運命にも遭遇している。こうし

た出来事が青年王粲の視野を広め、人間的に成長させたことは、容易に想像されるだろう。

また、王粲の家系は代々、清流派の党人官僚であったことも見逃せない。当然、彼は心中に、一人の知識人として儒教的な治世観を持っていたであろうし、為政者たらんとして勉学に励んでいたに違いない。このような彼が、歴史に深い関心を抱くのも至極もつともなことである。そのことは、後に、曹操の幕下で数々の献言、檄文を草したことでもうかがえようし、『隋書』経籍志には、王粲撰の『漢末英雄記』八巻が残闕するとあり、『唐書』経籍志にも「漢書英雄記十巻 王粲等撰」と著録されている。曹操の「薤露」と同様に「漢末実録」「詩史」といえる「七哀詩」が、王粲の手になったのは、むべなるかなと思われる。

詩中の「霸陵」は長安の東にある、前漢の文帝の陵。「下泉」は、『詩經』曹風の篇名で、悪政に悩む人々が、苦しい生活のなかで周代の善政を慕って、賢明な王が現れることを冀う心情を歌っている。王粲は「下泉」の作者に共感し、霸陵に葬られている下泉（つまり黄泉の世界）の名君文帝に想いを馳せているのである。

詩は、長安から霸陵に至るまでの道中に目にした悲惨な状況を、余すところなくリアルに描きだす。街を出た作者が目にしたのは、平原を累々と覆う白骨であった。そしてその中で練り広げられた、母が子を棄てるという光景。この婦人の叫びは、白骨の平原と相俟って、より一層悲痛に満ちている。しかし、この現実には作者王粲は何もすることができずに、母子のもとから立ち去る。この間に三回に涉って使われる「棄」の字が、そのたびごとに悲痛さを増しているようだ。

作者王粲は、この母子を救うことができないのを知っている。具体的悲しみ、小人の愛情（可哀想という同情）を越えた正確な詩人の「眼」で、時代の不幸を見つめている。「蒿里行」のように、為政者としての「力み」もなく、ある

母子をピックアップして描写する手法など、詩としての成熟度は曹操よりも上であろう。松尾芭蕉の『野ざらし紀行』の中で、富士川で、行き倒れの捨て子を見、あわれに思う気持ちが起こってきたがどうすることもできず、ただ食べ物を与えて通り過ぎるシーンがあるが、その時の「ただこれ天にして、汝の性の拙きを泣け」と言う言葉とも、相通するものがあるようだ。

鐘嶸は王粲を評して、

降及建安、曹公父子（曹操・曹丕）、篤好斯文。平原兄弟（曹植・曹彪）、郁爲文棟、劉楨・王粲、爲其羽翼。

〔詩品〕序

として、彼を「上品」にランキングしている。一方の劉勰も『文心雕龍』明詩篇で、四言詩と五言詩に定義付けをしたのちに、「兼ねて善くするは則ち子建（曹植）・仲宣（王粲）なり」と、曹植と並ぶ極めて高い評価を与えている。「建安七子集」を見てもわかるように、王粲の作品のなかで、最も貴ばれたのは「登樓賦」などに代表される「賦」のジャンルであって、その点、辞賦を重んじた『文心雕龍』のほうが、『詩品』よりも強く彼を推している。しかし、王粲が、最も得意とする「賦」ではなく、<sup>(10)</sup>五言詩で漢末の動乱をうたったということは、「七哀詩」が後年の作であろうことと考へ併せて、建安の文壇をリードした曹操の趣向が、王粲らサロンのメンバーに影響を及ぼしたと言えるのではなからうか。樂府を文人たちの創作として文学の舞台に登らせたのが、ほかならぬ曹操その人であったのだ。

董卓の乱の六年後、曹操は、本拠地の許（河南省許昌）に獻帝を迎え入れ遷都し、王朝の後楯として勢力を広げている。後漢最後の元号となる建安元年（一九六）のことであった。

(1) 鈴木修次著『漢魏詩の研究』(大修館書店 昭和四十二年三月) 第三章「建安詩考」の冒頭の「曹操論」に曹操の樂府

として以下の作品一覽を載せている。

1 1 3 氣出唱 (相和曲) 三首

4 精列 (相和曲)

5 度闕山 (相和曲)

6 薤露 (相和曲)

7 蒿里行 (相和曲)

8 對酒 (相和曲)

9 陌上桑「駕虹蜺」(相和曲)

10 短歌行「周西」(平調曲)

11 短歌行「對酒」(平調曲)

12 秋胡行「晨上」(清調曲)

13 秋胡行「願登」(清調曲)

14 苦寒行「北上」(清調曲)

15 塘上行「蒲生」(清調曲)

16 善哉行「古公」(琴調曲)

17 善哉行「自惜」(琴調曲)

18 步出夏門行「碣石」(琴調曲)

19 却東門行「琴調曲」

以上は完篇であり、断片を残すものに、董卓歌詞・飲馬長城窟行・善哉行・歌俗詞がある。

(2) 松浦友久著『中国詩歌原論——比較詩学の主題に即して——』(大修館書店 一九八六年四月) 所收の「樂府・新樂府・歌行論」の章に樂府詩と歌行の相違が、詳細に概念化されている。しかし、未だ一般的な概念になるには至っていない。

ないと考えられるので、本稿では、一般にいう「楽府」の意で用語を統一し、歌行という用語は用いなかった。

(3) 大典『史記』項羽本紀第七。「楚人沐猴而冠耳」

(4) 当時董卓を非難する歌が民間で唱われていたことは確かなようだ。丁福保の『全漢三国晋南北朝詩』には「董逃歌詞」として収めている。残存する句には董卓への非難の言葉は見られない。詳細は(1)前掲書を参照。

(5) 原文『楽府詩集』卷二十七所引崔豹『古今注』

薤露・蒿里並喪歌也。本出田橫門人。橫自殺、門人傷之、爲作悲歌。言人命奄忽、如薤上之露晞滅也。亦謂、人死魂魄歸於蒿里。至漢武帝時、李延年分爲二曲。薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人、使挽柩物歌之。亦謂之挽歌。

挽歌が田橫の死から始まったという「古今注」の説は、おそらくこじつけであろう。すでに紀元前五世紀頃のこととして、『春秋左氏傳』には「虞殯」という葬送歌のことが出てくる(哀公十一年)。一方、『詩經』国風の秦風には、挽歌の最も古いものの一つと思われる「黃鳥」三章が載っている。これらについては、機会を改めて考察したい。

(6) 「脚躡」の語は古くは『詩經』邶風の「搔首脚躡」や『李陵與蘇武書』の「執午野脚躡」等の用例がある。いずれも「ためらいとどまる」の意である。

(7) 例えば、「古詩十九首」「孔雀東南飛」など、人生のはかなさを歌う典型的な作品として挙げられる。

(8) 「七哀詩」其二に「荆蛮は吾が郷に非ざるに、何為ぞ久しくも滞<sup>とど</sup>まるや」とあり、少なくとも王粲が荊州に滞在した以降に詠まれた作品と考えられる。その志を得ぬ、苦悩の心境は「登樓賦」にも通じるものがあるように思う。

(9) 劉表が文教政策に力を入れていたことも、王粲が荊州に據った所以であろう。「劉表愛民養士、從容自保、境内無事、

關西・兗・豫學士歸之者以千數。表乃起立學校、講明經術(以下略)、『資治通鑑』卷六十二。因みに古楽府の「大提曲」にも、襄陽の繁榮ぶりがうたわれている。

(10) 曹丕は「典論論文」の中で「王粲は辭賦に長ず」といっており、当時から彼の賦に対する評価が高かったことがわかる。なお、同じ曹丕の「與吳質書」にも、同様の記述「仲宣は續いて自ら辭賦を善くす」がある。